

# 研究紀要

## 第112集

「総合的な学習の時間」に関する研究……………	義務教育研修課	1
—小・中学校における実践上の課題と評価—		
平成12年度高等学校「総合的な学習の時間」実施校における現状と課題……………	高校教育研修課	13
—平成15年度「総合的な学習の時間」本格実施に向けて—		
高校教員の資質向上をめざす研修計画……………	高校教育研修課	21
—教員のライフステージに応じた研修の在り方—		
今後の理科教育を展望した教員研修……………	松本 明紀	29
—諸調査をふまえた新たな講座の取組—	安達 佳徳	
	平松 紳一	
	一山 秀樹	
	堀 健児	
	沖田 雅一	
	寺村 雅守	
情報教育ネットワーク等を活用した教育活動の実践研究 I……………	情報教育研修課	37
—「心と心をつなぐ」テレビ会議等を活用した交流学习への支援—		
情報教育ネットワーク等を活用した教育活動の実践研究 II……………		
—テレビ会議等の活用への技術的な支援や教育情報ネットワークのサポート体制—		
「基礎学力に関する検討委員会」報告……………	藤森 陽子	57
—高等学校の卒業時において必要とされる基礎・基本の学力について—	山内 裕文	
	原 潤之輔	
	松田 義人	
	平松 紳一	
	小山 智久	
自己効力感から見た「トライやる・ウィーク」の教育的効果……………	古田 猛志	63
—「学校不適應感」群の変化を中心に—	住本 克彦	
中学生の「社会体験学習」の効果に関する研究 II……………	小林 宏	71
—不登校傾向生徒の「トライやる・ウィーク」効果を中心に—		

平成13年5月

兵庫県立教育研修所

## はじめに

21世紀が到来し、国際化、少子・高齢化の進展に加え、情報通信技術がかつてない速度で進歩しています。このような変革期のなかで、学校教育においては、基礎・基本を確実に理解させながら、子どもたち一人一人の個性を伸ばし、自ら考え主体的に行動する力を培い、基本的な倫理観や社会の一員としての規範意識を身につけた、心身共に健全な子どもたちの育成が強く求められています。

当教育研修所においても、教育を取り巻く現状を踏まえ、今日的な教育課題の解決に向け、所員一人一人が調査・研究を行っています。そのうち本紀要には、グループ研究7編、個人研究1編をまとめました。これらの研究が各学校の教育実践に役立つことを祈念しています。本研究について、率直なご批判、ご指導をお願いいたします。

最後になりましたが、調査、研究にご協力いただきました皆様に対して厚くお礼申し上げます。

平成13年5月

兵庫県立教育研修所長

市 村 允 正

## 研究主題 「生きる力」をはぐくむ学校教育の創造

### 1 研究の経緯

平成10年度にスタートした全国教育研究所連盟第16期共同研究は、当教育研修所が事務局を担当し、今、教育に求められている「生きる力」をメインテーマに、『「生きる力」をはぐくむ学校教育の創造』と研究主題を設定し取り組んできた。そして、平成12年度には、しめくりとなる第5回の全国研究集会を開催した。

本年度も、当教育研修所内の研究活動は、本県の教育課題を念頭におきつつ、全教連第16期共同研究の研究主題を共通主題とし、その主題に迫る具体的なテーマを掲げ、研究に取り組んできた。

平成10年度以来5回の全国研究集会においては、全国から計76本の研究発表がなされ、当所からも研究紀要掲載論文を中心に計8本の発表を行った。

### 2 研究主題設定の理由

これからの国際化、情報化、高齢化等のいっそうの進展や平成14年度からの学校週5日制の完全実施などの変化に、学校が的確かつ迅速に対応するためには、教育課程の編成や学校運営の在り方、教師の資質・指導力の向上などに関して、これまでの教育観や学校観を転換して対応する必要がある。

また、いじめ、不登校など、心の教育にかかわる課題がある今日、自立心や協調性、勤労の尊さや厳しさを学ばせるとともに、豊かな人間関係をはぐくむなど、共生の視点に立ち、人間としての在り方生き方を考える教育が求められている。

さらに、子どもの学習意欲を高め、教育内容の基礎・基本を確実に定着させるとともに、ゆとりの中で子どもたち一人一人の個性の伸長を図るために、指導方法の工夫・改善などの教育実践を行うことが重要である。

当教育研修所では、本県教育の課題や全教連第16期共同研究の趣旨を念頭におき、学校教育において、これら「生きる力」を育成するための具体的な方策を提言、調査研究するという観点から、『「生きる力」をはぐくむ学校教育の創造』を研究主題と設定した。

### 3 「生きる力」をはぐくむ3つの視点

「生きる力」をはぐくむための学校教育の創造について、全教連第16期共同研究で設定した3つの各部会の趣旨にそって研究を進めた。以下に各部会の研究テーマを示す。

#### [学習指導部会]

学習意欲を高めるための指導の在り方についての研究

#### [現代的課題部会]

社会の変化に対応する学校教育の在り方をはじめとする教育の今日的課題についての研究

#### [在り方生き方部会]

共生の視点に立ち、自己の確立や社会性の育成などを支援する教育についての研究

なお、本紀要は部会の研究テーマ設定の基本的な考え方を先に示し、部会ごとに編集した。

# 学習指導部会

## 研究テーマ

学習意欲を高めるための指導の在り方について研究

### 研究テーマ設定の基本的な考え方

21世紀を担う子どもたちが、変化の激しい社会の中で、豊かな人間性を培い、よりよい社会を構築していこうとするためには、学校において、主体的・意欲的に学習の取り組む姿勢や態度を育てることがより一層必要となってくる。

試行錯誤することのない受け身の学習では、自ら学び、考え、判断しようとする姿勢や態度は育ちにくい。そこで、個の学びを大切にしながら共に学習する中で、一人一人の良さが生きる体験を積み重ねていくことが必要になる。そのためには、子どもが主体的に考えたり、判断したり、表現したりする体験を通して、問題をよりよく解決する能力を培い、成就感や達成感を味わわせることが求められる。これらの活動が、自信や学ぶ喜びにつながり、やがて学んだことが豊かな自己表現に向けて生きてはたらく力となるのである。

このような観点から、「学習指導部会」を設定し、個が生きる学習、共に高め合う学習を通して学習意欲の高揚を図る指導の在り方について研究を高めることにする。

# 「総合的な学習の時間」に関する研究

## —小・中学校における実践上の課題と評価—

義務教育研修課 主任指導主事兼課長 公家 裕 主任指導主事 藤川智代子

指導主事 山本 雄幸 指導主事 一山 秀樹

指導主事 森本 寿文 指導主事 小山 智久

### 要 旨

平成12年度は新教育課程の移行1年目にあたり、県内の多くの学校で「総合的な学習の時間」が実施されている。研究にあたって、「総合的な学習の時間」について、学校経営研修講座等の受講者にアンケート調査を実施し、学校での取組状況や問題点について分析した。その結果、教科等との関連、教師の共通理解、評価等が課題として明らかになってきた。そこで、小・中学校「総合的な学習の時間」を考える研究講座参加者の学校の実践事例から実践的な手法を探り、取組の方向を示唆するとともに、評価の工夫改善についてポートフォリオ評価の試みを示した。

キーワード 総合的な学習の時間、アンケート調査、カリキュラム編成、単元開発、教科等との関連、教師の共通理解、評価、ポートフォリオ

### はじめに

本年度は新しい教育課程の移行措置1年目であるが、新教育課程の実質的なスタートの年と考えられ、「総合的な学習の時間」も県内の多くの学校で実施されている。

「総合的な学習の時間」のねらいは、「自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題解決する資質や能力を育てること」、「学び方やものの考え方を身に付け、問題解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにすること」である。

「総合的な学習の時間」には、それぞれの学校の実態に応じて、カリキュラムや教材（単元）を開発していくことが求められ、各学校の特色ある教育活動や教師の創意工夫が問われることとなる。この時間を構想し展開するとき、全教職員がこの時間の趣旨やねらいを共通理解し、学校や地域、子どもの実態に応じ、創意工夫を生かす必要がある。

そこで、アンケート調査により、学校での取組の状況や課題について分析し、小学校・中学校「総合的な学習の時間」を考える研究講座に参加した学校の実践事例等を考察し、推進にあたっての方向を示した。

### 1 校長、教頭及び教員へのアンケート調査

#### (1) 調査対象、調査期日

① 小・中・養護学校学校経営（新任校長）研修講座、

受講の校長113名（H12. 12. 5調査）

② 小・中・養護学校学校経営（新任教頭）研修講座、  
受講の教頭110名（H12. 11. 20調査）

③ 小学校「総合的な学習の時間」を考える研究講座、  
受講の教諭43名（H12. 11. 13調査）

④ 中学校「総合的な学習の時間」を考える研究講座、  
受講の教諭26名（H12. 11. 27調査）

#### (2) 調査回答数（有効回答数）

	小学校	中学校	養護学校	合計
校長	74	32	2	108
教頭	65	33	2	100
教諭	35	19	1	55
計	174	84	5	263

・アンケートの全項目に対して回答のあった数を有効回答数とした。

・受講者のうち、養護学校小学部の回答は小学校に、中学部の回答は中学校に含めた。

#### (3) 調査方法、調査分析方法

① 質問紙法（資料としてP.12に掲載。アンケート調査は、東京都立教育研究所「総合的な学習の時間の実施に向けた学校・学年経営の在り方」を参考にした。）

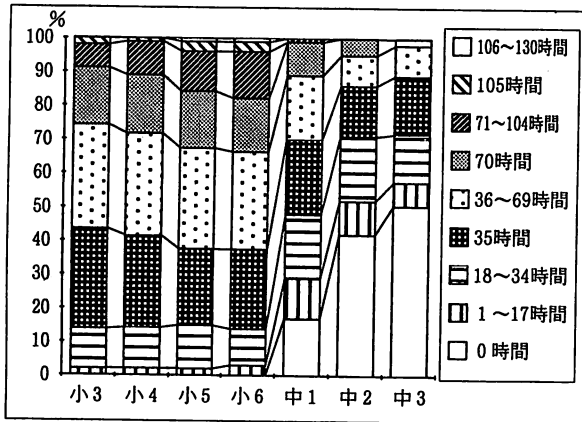
② 検定は $\chi^2$ 検定で行った。

③  $\chi^2$ 検定の結果、取組状況についての管理職と教諭の差は認められず、職種別については述べない。

④ 調査項目2-(2)学習内容以下は複数回答によるもので、合計が100%を超えている。

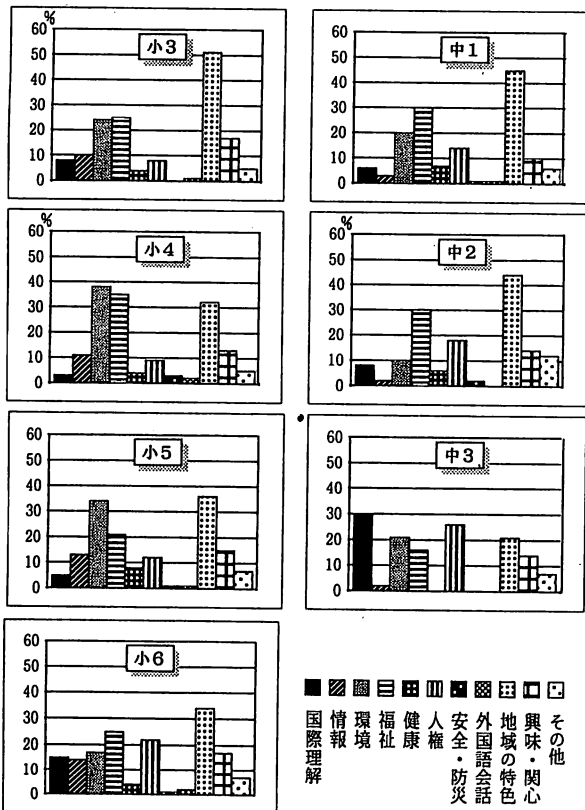
(4) 調査結果

① 「総合的な学習の時間」の実施時間数の状況



- ・小学校の80%以上の学校で、各学年とも35時間以上実施している。
- ・学年別の時間数を比べてみると、小学校では学年間の有意な差は認められない。
- ・中学校で35時間以上実施している学校は、1年では50%程度で、2年、3年で30%弱である。
- ・中学校で時間設定のない学校は、1年で約20%、2年、3年で50%程度である。

② 実施内容（以下複数回答）

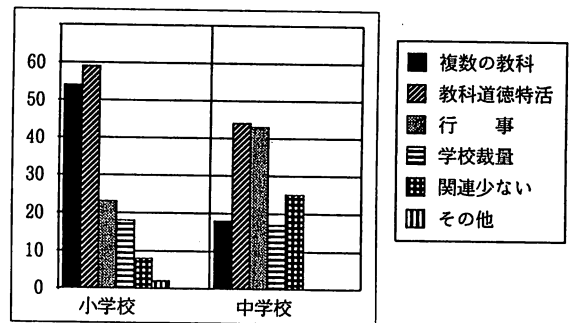


- ・小学校における学習内容に関しては、「地域の特色・伝統文化」が最も多く取り上げられている。特に社会科で「昔の暮らし」など市町をベースにした学習

が中心となる3年で顕著である。学年ごとに若干の差はあるが、「環境」「福祉」「人権」がよく取り上げられている。

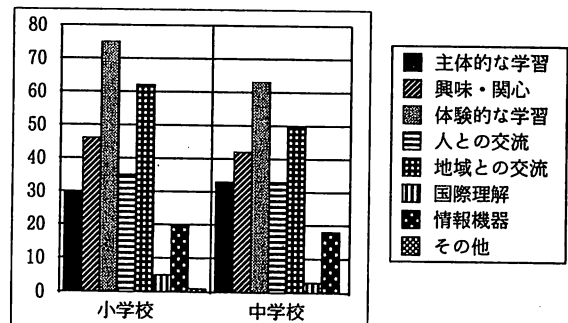
- ・中学校においても「地域の特色・伝統文化」を取り上げている割合が多く、特に1年、2年では顕著である。
- ・「環境」は小4年、5年で、「福祉」は小4年と中2年、3年でよく取り上げられている。
- ・各学校の卒業学年である小6年と中3年では、取り扱う内容が他の学年とやや異なった傾向を示している。「国際理解」「人権」を取り上げる割合が多くなってきている。

③ 教科等との関連



- ・小学校では、半数以上の学校で「複数の教科」「教科、道徳、特別活動」と関連させている。
- ・中学校では「複数の教科」と関連させた取組をしている割合が約20%と低い。「あまり関連を図っていない」との回答も20%を超えている。
- ・「行事」と関連させた取組をしている割合は、小学校では約20%であるのに対して、中学校では40%を超えている。

④ 実施後の成果

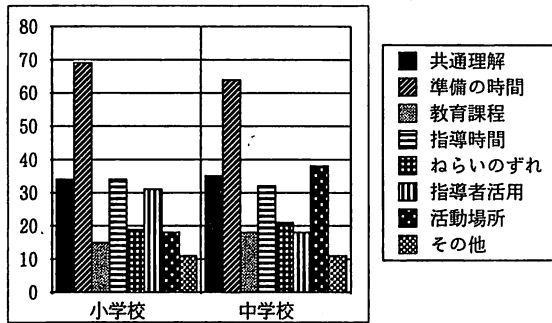


- ・小中学校とも半数以上の学校で、「体験的な活動ができた」「地域との交流ができた」ことを成果としてあげている。
- ・続いて、「興味・関心が高まった」「人との交流ができた」「主体的な学習ができた」「情報機器の活用が

できた」の順となっている。

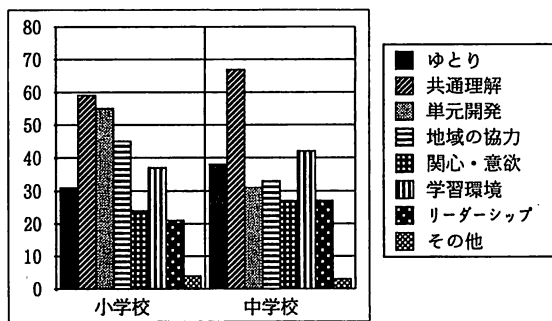
- ・「国際理解が進んだ」は、他の項目と比べて低い値を示している。

⑤ 困ったこと



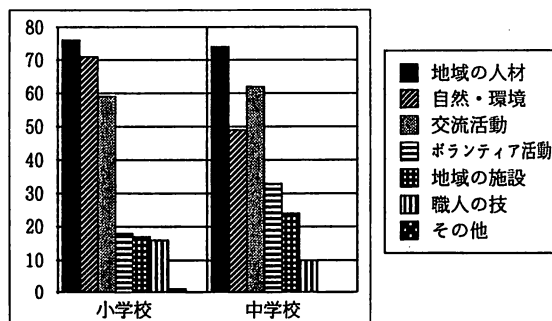
- ・小中学校とも「準備や打合せの時間確保」を困ったことの一つにあげている。続いて「教師間の共通理解」「指導時数の確保」の順となっている。
- ・「学校外の指導者の活用」「校内での活動場所の確保」については、小学校と中学校で若干の差がある。

⑥ 今後の実施に向けて重要なことから



- ・小中学校とも「教師間の共通理解」を最も重要であるとし、中学校では約70%に達している。
- ・「単元開発」を小学校では重要であるとしているが、中学校ではさほど高い数値を示していない。

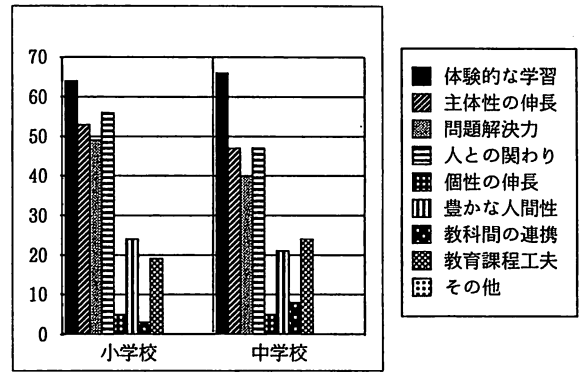
⑦ 今後の地域活用



- ・小中学校とも「地域の人材」「地域との交流」「地域の自然・環境」を生かした活動を多く取り入れたいと考えている割合が多い。
- ・「職人の技・工芸・産業等」「地域の施設」を生かしていこうと考えている割合は比較的少ない。

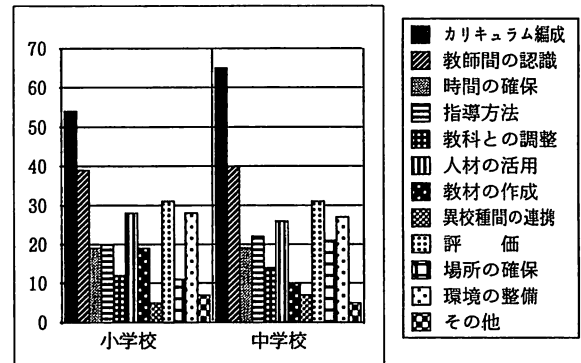
- ・小中学校間では「地域の自然・環境」「ボランティア活動」に差がある。

⑧ 今後期待すること



- ・「総合的な学習の時間」を実施することで「体験的な学習による意欲や興味・関心を重視した学習」「主体性の伸長」「人との関わりを学ばせる」「問題解決力の育成」を期待している割合が多い。
- ・「個性の伸長」「教科間の連携」を期待している割合は少ない。

⑨ 今後の課題



- ・「カリキュラム編成」が課題であると回答している割合が多く、中学校では約60%の学校で課題としている。続いて「教師間の認識」「評価」「環境の整備」の順となっている。
- ・「校種間の連携」「教科との調整」を課題としてあげている割合が少ない。

(5) 考察

① テーマ設定と教科等との関連

現在、「総合的な学習」は小中学校同時進行で実施しているため、同テーマ同内容の扱いについて問題となっていないが、今後、小学校で取り上げたテーマを中学校で再度扱うようなことが考えられ、小中学校間のカリキュラム上の連携を一層図る必要がある。また、子どもの興味・関心、意欲の連続性や発展性などから各教科等との関連を図りながらテーマを設定し

ていくことが必要である。(実践1：家島町立坊勢小学校、実践2：明石市立二見西小学校、実践3：但東町立但東北中学校の取組参照「以下同様」)

教科等との関連では、「複数の教科」と「学校行事」において、小中学校で顕著な差が見られる。複数の教科との関連を図ることについては、小学校では学級担任制の利点から総合的に扱われているが、教科担任制の中学校ではかなりの困難を伴っているようである。例えば、クロスカリキュラムの考え方や選択教科との関連で、各教師の専門性を生かした教科間の連携が必要である。

また、中学校では多くの学校で「トライやる・ウィーク」等の学校行事と関連づけて行っているために、「学校行事等との関連」の割合が多くなっていると考えられる。(実践4：小野市立旭丘中学校)

実施後の成果としては、「体験的な活動・地域との交流ができた」という意見が多い。地域に根ざした取組は普段の生活の中に学ぶ対象があるために、達成感や充実感につながっているようである。しかし、この時間のねらいである「主体的な学習ができた」という割合は総じて低く、「自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え…」という目標達成に向けた学習を仕組んでいくことが大切である。(実践5：加古川市立浜の宮小学校、実践6：大河内町立大河内中学校)

また、「情報機器の活用ができた」「国際理解が進んだ」という回答は他と比べてやや低いが、情報環境の整備が進められるに従い、機器活用の割合は高くなるものと思われる。

国際理解についても、ますます進展する国際化の中で豊かな国際人の育成が求められている。シドニーオリンピックを題材にした活動や地域の外国人の人々との交流など体験を通じた実践例もあり、今後その取組が増えてくると思われる。

## ② 教師の共通理解

小中学校とも困ったことの第一に「準備や打合せの時間確保」をあげている。このことから、「総合的な学習の時間」では、学級や教科の枠を越えた取組、異年齢の児童生徒との交流や学校外の指導者との連携など柔軟な取組が必要となり、学級・学年や教科を固定的に考えることが見直され、協働して取組む必要性が大きくなっていることがうかがえる。

小学校で課題となっている「学校外の指導者の活用」については、小学校区単位の人材バンク作成は生活科での積み上げもあり、ある程度整備されている。市町単位又は小中学校区単位の人材バンクづくりなど、学校間のネットワークを広げるとともに、計画段階で活動内容と予算案の検討が大切である。(実践7：篠山市立篠山中学校)

中学校で課題となっている「校内での活動場所の確保」については、環境整備を進める一方、学年ごとの時間割の工夫や選択教科の時間等との関連を図るなどの工夫が求められる。(実践8：小野市立小野南中学校、実践9：姫路市立増位中学校)

## ③ 単元開発、カリキュラム編成

その他重要な課題として「単元開発、カリキュラム編成、評価」があげられている。このことは、今まで以上に学校の創意工夫を生かした特色ある取組ができる機会と場が与えられたといえる。

教職員が互いに知恵を出し合い、特色ある学校づくりを一層進める必要がある。特に、カリキュラム編成については、どのような活動内容を、どのような順序で配置するかを考える必要がある。(実践10：姫路市立曾左小学校、実践11：八千代町立八千代西小学校、実践12：豊岡市立豊岡南中学校)

身近な地域を学習の舞台とすることが多い「総合的な学習の時間」では、教師の努力や情報だけで進めようとするれば、間接的に伝えたり、教えることが中心となりがちである。教師は、子どもと地域を出会わせていくコーディネーターとして、さまざまな学習を構想し、子どもの興味・関心を喚起し、課題意識を育成していくことが求められる。

そのため、地域のさまざまな人との交流や地域の自然、産業などに触れるなど体験活動を通して自ら学ぶ力を育成することが大切である。地域の人材、自然や産業を生かした学習活動が多くの学校で取り込まれる理由もここにある。(実践13：竹野町立竹野小学校)

## ④ 評価

「総合的な学習の時間」の創設は、これまでの指導観、学習観の転換だけでなく、それに伴って評価観の転換が必要となる。学習指導要領の総則において、「児童のよい点や進歩の状況などを積極的に評価するとともに、指導の過程や成果を評価し、指導の改善を



行い学習意欲の向上に生かすようにすること。」と示され、よい点や進歩の状況などを取り上げて評価することが求められている。

そのためには、「指導と評価の一体化」が図られ、各学校において、単元やカリキュラム改善の検討とともに、評価方法の工夫改善が課題となる。(実践14：伊丹市立緑丘小学校)

## 2 アンケートからの課題とその実践例

1のアンケート調査の考察で取り上げた課題等について、「総合的な学習の時間」を考える研究講座に参加した学校の実践事例を考察しながら、「総合的な学習の時間」の在り方について探っていく。

### (1) テーマの設定と教科等との関連

#### ① 教科等との連携を図りながら進める

##### 実践1：水のふしぎをさぐる [家島町立坊勢小学校]

坊勢小学校の4年生では、単元「水のふしぎをさぐる」を設定している。子どもたちは、水道のコックをひねると水が出てくるのがあたりまえの世の中に育ってきている。家島町の水は、町内のものではなく千種川の水で、赤穂から海底送水管を通して坊勢島まで送られてきている。現在のような状況になるまでに島の人々が大変な苦勞をしてきたこと等を、ほとんどの子どもたちは知らない。この先人たちの苦勞を知り、水に興味を持って、水を大切にす気持ちを持たせたいとの願いから設定した単元である。

「坊勢の水はどこからくるのだろうか」と問いかけ、浄水場等の見学、古老や水運搬船乗務員への聞き取り、水運び体験活動などを組み込み、社会科・図工・理科・国語・学級会活動との関連を図った構成となっている。

##### 実践2：二見西発見隊 [明石市立二見西小学校]

二見西小学校の4年生では、単元「こちら二見西発見隊！」で、既習の社会科「水はどこから」、理科「流れる水のはたらき」など、教科と関連させた環境学習を行っている。

学習は、子どもたちが身近な川が存在を知ることから始め、「川の生き物、川の様子、川と暮らしとのかわり」について調査し、自分たちの生活に密接にかかわる川と水についての知識を深め、ポスター、新聞、絵本・紙芝居・ビデオ等でみんなに環境保全の大切さを伝える活動を展開している。

#### ○教科等との関連

国語科 「せいそう工場の見学」(6月)  
「グループ新聞づくり」(10月)  
社会科 「住みよいまちづくり」(9月)  
・水はどこから ・ごみノートをつくらう  
理科 「流れる水のはたらき」(9月)

#### ○体験的活動

谷八木川見学(6月)  
谷八木川調査、瀬戸川調査(6月)  
環境政策課の方のお話を聞く(7月)  
浄水場・下水処理場見学(9月)  
ごみ処理場見学(9月)

二見西小学校のように、身近な川や池を題材とした環境をテーマに学習している場合が多い。しかし、小中学校で連携した取組をしているところは少なく、今後は、小学校の時に取り上げた内容を中学校でも再度扱うような場合も出てくる。

そのような場合、小学校では、川や池の中の肉眼で観察できる生き物を主として扱い、中学校では、小学校での調査内容に加えて、例えば、プランクトンの種類、水のpHやCOD、リン酸塩濃度などの水質汚染等を調べるような川や池を総合的に学習することが考えられる。

また、中学校で環境を扱う場合、選択理科との関連を図り、地球規模の環境問題を視野に入れた取組へと発展させていくことが大切である。

##### 実践3：里山 [但東町立但東北中学校]

但東北中学校では、かつて生活と密接に結びついていた里山を題材に里山の役割やはたらきを理解させ、社会科「身近な地域」、理科「植物の生活と種類」、自然環境と関連させて、森林・林業についての学習を行っている。

講師に豊岡農林事務所の職員を招き、森林の役割と機能についての話を聞き、ひのきの間伐を体験している。ある生徒は学習後の感想を次のように書いている。「昨日、初めてひのきの間伐をしました。のこぎりであんな大きな木を切るなんて、少し不安な面もありました。でも、講師の先生方にいろいろ教えていただいて2本も切りました。切った2本ともうまく倒れて良かったです。また、森林の木々は、元の木が倒れ朽ちるときに出す二酸化炭素を栄養分として吸収し、どんどん大きくなると教えていただきました。昨日は本当にありがとうございました。」

この取組から、地域や学校の特色を生かした体験を通して、学んできた知識と先人の知恵とが結びつき、自然とともに生きることの大切さを学んでいる様子が

うかがえる。

## ② 行事との関連を図りながら進める

### 実践4：地域を知ろう [小野市立旭丘中学校]

旭丘中学校の1年生では、「地域を知ろう LIVE TOGETHER-ONO-」をテーマに、「ミニトライやる」「交流学习」などの今までの行事を核にして単元を構成し、次のような学習を進めている。

- ・学習の手順を学ぶ。
- ・自然や文化・産業に関心を持ち、調べ学習や体験学習を通して郷土に愛着を持つ。(ミニトライやる)
- ・調査活動、体験活動を通して人との対応や情報活用の仕方を学ぶ。
- ・高齢者等との触れ合いを通して自らの課題として受け止める。(交流学习)
- ・地域とのコミュニケーション活動

その中で、次のような学習形態の工夫をすることにより、学習に変化があり楽しい取組がされている。

- ・資料研究(間接体験)
- ・実験、観察、見学、調査(直接体験)
- ・製作、生産(劇、スライド、模型、園芸など)
- ・スピーチ、討論
- ・社会体験(直接体験)

## ③ 興味・関心に応じた内容で進める

### 実践5：環境特命リサーチ隊 [加古川市立浜の宮小学校]

浜の宮小学校の4年生では、単元「レッツゴー！環境特命リサーチ隊」を設定し、環境教育に取り組んでいる。環境特命リサーチ隊の活動は次のようになっている。

- 1 環境問題をリサーチしよう。  
校内や地域をカメラ(インスタント、デジタル、ビデオ)で撮りながら見てまわる。
- 2 特命リサーチ隊出動！
  - (1) 浜小ピカピカ隊  
何でも変身隊、がむしゃらお掃除隊、緑一杯がんばり隊、呼びかけスペシャル7人隊
  - (2) 浜っこ地域で行けいけ隊  
体にいいものパクパク隊、便利グッズ発明し隊、公園グッズ発明し隊、きれいにしよう呼びかけ隊
  - (3) みどり守り隊  
鳥を集め隊、花を植え隊  
グループごとに調査活動をする。
- 3 リサーチ隊からメッセージを伝えよう。  
リサーチ隊での調査したことを発表する。

子どもたちにカメラのレンズを通して地域を見させ、子どもたちが感動や好奇心をもち、「調べたい」「つくりたい」「やってみよう」という強い思いをもたせている。そして、特命リサーチ隊をクラスごとに編成し、自分たちでできそうな活動を計画し活動している。

この取組は、子どもたちが日頃何気なく見ている景色をレンズという媒体を通して興味・関心を高めさせ、自ら課題を見つけ、自ら学んでいる学習である。

### 実践6：郷土に触れる [大河内町立大河内中学校]

大河内中学校では、「郷土に触れる」をテーマに、郷土に古くから伝わる伝統的な文化や食製品に触れ、それらについて調べたり、自らの手で実際に作ったりすることを通して郷土を知る学習を進めている。

生徒がそれぞれの家庭で「大河内での伝統的なもの」を聞き、「学びたい」と「調べたい」という意欲をもち、地域の人を指導者として生徒と一緒に教師とともに学んでいく。生徒たちが設定した題材は、「こんにゃく、豆腐、そば、炭焼き、みそ、しめ縄・餅花」で、班編成して学んでいる。

この取組では、生徒の興味・関心から出発し、地域の教育力を最大限に活用している。地域の特性や地域の指導者を見出すために、教師自身が地域から学ぶことから始めている。地域をまわり、地域に働きかけ、指導者の発掘などを教師がチームを組み、足で稼いだ取組であり、地域に根ざした学習である。

## (2) 教職員の共通理解と指導体制

### ① 指導体制を整える

#### 実践7：まなびすとバンク [篠山市立篠山中学校]

本年度は、1年生で週2時間(火曜日の5・6校時)、「総合的な学習の時間」を設定している。学習のテーマ「ふるさと探究“ささ山”」にそって、6つの学習分野(国際理解、環境、福祉、健康、情報、地域)から生徒がやってみよう分野を1つ選んで学習している。

学年全体で7名の教師が指導しているが、そのうちの1名は、フリーでいろんな分野を指導している。

11月末までに13名の外部講師を依頼した。外部講師は篠山市の「まなびすとバンク」制度を積極的に活用し、いろいろな分野の講師を選んで依頼している。

全教師が6つのいずれかの分野に所属して、課題分野会を開き、年間指導計画や取組状況や課題などを話し合っている。また、研究推進委員会でも課題分野会で出てきた計画や課題を検討し、職員会議で全職員が全分野でどう進めているかなど共通理解を図っている。

## ② 学習環境を整える

### 実践8：パソコン開放 [小野市立小野南中学校]

小野南中学校では、インターネット接続が可能にな

った夏休みに6日間、1日に2時間図書室のコンピュータを開放し、2学期からはコンピュータ室も開放し、生徒が自由に利用できる環境を整えている。

夏休みの図書室開放は、図書室前に利用スケジュールを置き、前日までに申込み、空きがあれば自由に使える。初めての試みであったので、図書当番として1～2名の教師がその場につき、質問やトラブルに対応した。

コンピュータ室は、同時に42人の生徒が利用可能で、毎時間ほぼ満員の状態である。「総合的な学習の時間」や各教科の学習で利用している。この部屋には情報教育指導補助員が常駐し、生徒の質問等への対応に当たっている。

### ③ 時間割や活動場所を工夫する

#### 実践9：7講座7学級 [姫路市立増位中学校]

増位中学校は大規模校であるため、時間割や活動場所の工夫が必要である。

1年生では、水曜日の5校時に「総合的な学習の時間」を設定し、6校時の学活の時間と併用して弾力的に活用している。学級を単位として7つの講座を7学級がローテーションし、すべての基礎的な内容を学習するようにしている。

7つの講座は、「ビデオ編集（メディア操作）、データをグラフに表す（情報の処理）、人と会う（情報の収集、礼儀・マナー）、旅にいこう（情報の収集・処理）、紙芝居をつくる（表現方法）、新聞からの情報（情報の収集、まとめ）、新聞作り（情報の整理、表現方法）」である。

指導に当たっては10名の教師が担当し、7講座のうち3講座で2名の教師による複数指導を行っている。

#### (3) 特色ある単元開発、カリキュラム編成の工夫

#### 実践10：ケナフを育てて、とことん楽しもう [姫路市立曾左小学校]

曾左小学校の3年生では、ケナフの栽培活動を畑作りから始め、最終的には葉書を作り、自分にとって大切な1枚の葉書を送りたい人に書く喜びを体得する学習と位置付けている。

この取組の特徴は、「畑作り」から始めた点である。「ケナフ用の大きな畑を作ろう」と荒地の開墾を始めた。すると、足りない土をどうするか、生育に必要な水はどこからどのように運ぶかなど次々に課題がでてきた。なかなか思うように進まない。学校や地域の人々の支えによって、荒地の掘り起こし、石拾い、土運

び、土ならし、畝づくり、ポンプの設置などが実現していくことを通じて、住む地域のよさを感じとるのである。このみんなで汗を流して取り組む時間こそ、ケナフを育てる思いを一層膨らませた時間であった。

また、植え替え時に一本ずつ家に持ち帰り、家庭でも育てたこと、夏休みに親子で水やりをすること、クッキー作りを一緒にするなどの活動を組入れたことにより、親子のコミュニケーションや学校と家庭との連携も強まったと考える。

#### 実践11：大和しいたけの秘密をさぐる [八千代町立八千代西小学校]

八千代西小学校では、「いのち」「自然・環境」「文化」を「総合的な学習の時間」で学ぶ領域とし、学ぶ内容の順序性、学年間の系統性と学年の独自性に留意しながら、カリキュラム編成をしている。

3年生では、校区探検から地場産業の椎茸栽培を素材として、「大和しいたけの秘密をさぐる」をテーマに学習を展開している。調べて分かったことや学習を通して思ったことを全校生に知らせることにし、実際に椎茸を栽培することにも挑戦している。

#### 3年生『大和発見』の年間カリキュラム

	1 学期	2 学期	3 学期
	大和しいたけの秘密をさぐる	ザ・シイタケ「やまと」PR大作戦	大豆を変身させよう
環境	①大和を探検しよう 何があるかな ・しいたけ ・大豆 いちご等	②栽培農家の人になぞねてみよう	②調べて見よう
いのち	②しいたけの「なぜ?」を見つけよう ③しいたけ博士になろう	③栽培農家の人と交流を深めよう ④大和のしいたけをPRしよう	①大豆から何ができるの?
文化	④西小にしいたけランドを作ろう	①自分たちでしいたけを栽培しよう	③豆腐づくりや味噌づくりに挑戦しよう ④大和の特産物フェアを開こう
	しいたけ栽培 (収穫は随時) → 大豆栽培 → 大豆収穫 →		

①～④は学習の流れを表す。

①：ふれる ②：つかむ ③：深める ④：生かす

椎茸の栽培では、日頃の世話がなければ立派な椎茸ができないということを体験的な活動を通して学んでいる。この学習を通して、大和の人々の生き様や願いを感じ取り、自分のふるさと「大和」に目を向ける契機となった取組である。

## 実践12：君はイカしたイカ博士 [竹野町立竹野小学校]

竹野小学校の6年生では、「わがふるさと“たけの”」を年間テーマとして設定している。

ふるさと竹野を見つめ直す題材として、“漁火”を取り上げている。竹野港から毎晩出ているイカつり漁船は、ふるさとの誇るべき夏の風物詩となっている。イカにたずさわる人や自然から直接学ぶことによってふるさとのよさを再認識し、ふるさとのために貢献できる子どもを育てたいとの教師の熱い願いから、この単元は設定された。

子どもたちのイカについての疑問や課題は、スミ、体のつくり・しくみ、生態、吸盤、習性、エサ、種類、足、料理法など、多岐にわたっている。調べた結果を、新聞や4コマまんが、紙芝居、劇、模造紙、OHP、VTRなどでまとめ、発表している。さらに、教科等との関連も深まり、音楽で創作「いか音頭」、特活で海岸道路の新名称に応募へと、町づくりにも参加するという意欲につながった高学年ならではの取組である。

## 実践13：学び方を学ぶ [豊岡市立豊岡南中学校]

豊岡南中学校の1年生では、「総合的な学習の時間」を毎週水曜日の5校時に実施している。1学期は、「『総合的な学習の時間』の学び方」のハンドブックを配布し、以下の内容を学習している。

①共に学ぶ学習…話し方、聞き方、話し合いの方法・進め方、班での話し合い、学級での話し合い

②調べ学習…調べる方法、本のいろいろ、取材方法、電話のいろいろ、取材中の行動、敬語のいろいろ、取材後のお礼、手紙のいろいろ、まとめる、発表しよう

1学年の学習テーマを「身近な人間や環境との共生」とし、2学期の「社会の中で生きる—家族の生き方を通して考える—」（8時間）の中においても、インタビューの仕方や新聞作り（レイアウト、割り付け、レタリング、文末表現、グラフの役割、挿絵など）を実施している。

このように、情報の集め方、調べ方、まとめ方、報告や発表、討論の仕方などの学び方やものの考え方を計画的に育成していくことが大切である。

## 3 評価の在り方とその方法

### (1) 評価の方向

評価の目的は「指導の改善」と「学びの向上」にある。教師においては、子どもたちの主体的な活動への

支援となって生かさなければならぬし、子どもたちにとっては、評価が適切な情報となり、さらに学習意欲を喚起し、学習に深まりが出てくるものでなければならぬ。

平成12年12月の教育課程審議会答申では、「総合的な学習の時間」の評価の在り方について、次のように述べている。<sup>1)</sup>

「総合的な学習の時間」については、各学校において学習活動を定め、学校や児童生徒の実態に応じた特色ある教育活動が展開される。このような趣旨から、学習の状況や成果などについて、児童生徒のよい点、学習に対する意欲や態度、進歩の状況などを踏まえて評価することが適当であり、数値的な評価をすることは適当ではない。

このことは、獲得した知識や技能の量ではなく、学び方がどうであったか、自らの課題にどう取組み、追究しているかなど「学びの姿」を見ていくことの重視性を示している。すなわち、学習の過程における、

- ・どんな伸びやよさがみられたか
- ・何を学び、何ができるようになり、どんなことが身についたか
- ・取組への参加意欲・態度はどうか

などについて評価することが求められている。

### (2) 評価の規準を明確にする

#### ① 観点を定める

「総合的な学習の時間」は、具体的な目標・内容や方法は示されていない。各学校で、学習指導要領に示されたねらいを踏まえ、その具体的な目標・内容に基づき、観点を定めて評価を行うこととなる。

前記の答申では、評価の対象をどのような側面から捉えたらよいかを示す「観点」として次のように例示している。

- 「総合的な学習の時間」のねらいから  
「課題設定の能力」「問題解決の能力」「学び方、ものの考え方」「学習への主体的、創造的な態度」「自己の生き方」など
- 教科との関連から  
「学習活動への関心・意欲・態度」「総合的な思考・判断」「学習活動にかかわる技能・表現」「知識を応用し総合する能力」など
- 各学校の定める目標、内容から  
「コミュニケーション能力」「情報活用能力」など

② 学習過程に位置付けた評価規準を作成する

「観点」は、各学校で決めた「学習活動」で育てるべき資質や能力である。「生き生きと活動していた」などと情緒的なものではなく、子どもたちに身につけさせたい具体的な資質や能力を明確にしておくことが重要である。また、子ども一人一人の進歩の状況に注目

し、学習過程にそった評価が必要である。

そこで、日台案<sup>2)</sup>等を参考にしながら、何について評価するかを示す「評価規準」と「育成したい資質や能力」を学習過程に位置付けて表1（「総合的な学習の時間」のねらいに基づいた場合）を作成した。

表1 評価の観点・規準と育成したい資質と能力（試案）

学習過程	(ア) 観点・規準（「総合的な学習の時間」のねらいから）	(イ) 育成したい資質と能力
課題発見	1 課題設定の能力 自ら課題を見つけ、その解決のための活動計画を立てることができる。	<b>興味・関心・意欲</b> <b>問題解決の能力</b> 課題発見力、企画力、調査・観察力、追究・実行力、意味付ける力、運営力、選択力・決定力、判断力、表現力 等 ・情報活用能力 情報活用の実践力、情報の科学的な理解、情報社会に参画する態度 ・学習スキル 集め方、調べ方、まとめ方。報告や発表・討論の仕方などの方法を身につけて、活用することができる。 ・社会的スキル コミュニケーション能力、人間関係能力（協力、共感、抑制力など）等 <b>メタ認知の力</b> 自己評価能力、創造力、振り返る力 等 <b>生き方（自己効力感等）</b> 向上心、自信・よさへの気付き、価値意識（愛着、誇りなど）の向上、成就感・達成感、生活改善への決意、将来展望 等
課題追究	2 問題解決の能力 自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決することができる。	
表現	3 学び方、ものの考え方 情報の集め方、調べ方、まとめ方、報告や発表・討論の仕方などの方法を身につけて、活用することができる。	
発展・生活化	4 学習への主体的、創造的な態度 問題の解決や探究活動に向けて、自ら意欲をもって主体的、創造的に取り組もうとする。	
	5 自己の生き方 自分の考えや意見をもったり、自分のよさに気付いたり、自分に自信をもったりするなど、自己の生き方について考えようとする。	

評価方法

- 児童生徒の自己評価    ○教員による観察、面接    ○ポートフォリオ評価（児童生徒の自己評価カード、記録カード、ノート、レポート、作品、日記、ビデオテープなど）    ○児童生徒の相互評価
- 他者評価（保護者、地域の人々からの感想・意見など）

③ 単元毎に評価基準を設定する

さらに、個々の学習活動に対して的確な評価・支援を行うために、評価規準をより具体化した評価基準をつくる。例えば、「自分が調べたことを分かりやすく伝える方法を選んで、効果的にまとめ発表することが

できる」等と発達段階を考慮し、活動における子どもの具体的な姿を想定して設定する。

具体的な取組例

伊丹市立緑丘小学校では、表2のように、単元指導計画の中に学習の流れ（学習過程）にそって「育てた

表2 実践14：第6学年「世界まるごとウォッチング」単元指導計画（全30時間）

【伊丹市立緑丘小学校】

【学習の流れ】	【各自の気づきと共有化】	【育てたい力】	【評価の手だて】
(1) 自分の課題を決める。(4h) ・オリンピックの開会式を見る。  ・自分の調べたい国を決める。 ・学習の進め方を考える。	オリンピックの開会式を見る ・色々な国があるなあ。 ・フリーマンさんはアボリジニ出身だって。アボリジニって？ ・韓国・北朝鮮の時すごい歌声が起こったよ。 世界には色々な国・文化があるんだ。自分たちで調べよう。	・課題をつかむ力	・自己評価カード（随時） ↓ 軌道修正 次へのステップ ・相互評価カード（付せんを使って）
(2) それぞれの国について調べる (20h) ①調べたいと思ったことから調べる。 ・調べたこと・資料はファイルにとじる。 ②情報交換 ・発表、質問 ・他の人のファイルを見る ③調べ学習 ・続き ・新たな課題 ①②③の繰り返し ・自己評価カードの記入 (3) 発表 (4h) ・自分の課題こつてわかったこと、考えたことなどを発表する。	各自で追求・表現 自然・言葉・国旗・くらし・食べ物・民族 情報を交換 パンを食べている国、ご飯を食べている国はどこ？ 一つの国にたくさんの民族が住んでいる国もあるよ どんな言葉が使われているんだろう 各自で追求・表現 自分の調べている国はどうだろう 世界の国々にはそれぞれの文化があるんだ	・自分なりの方法で情報収集する力 ・調べたことをまとめ表現する力 ・友だちや自分の良さに気付く力 ・調べたことを発表しあい、共有化する力 ・新しい疑問を見つけ、さらに追求する力 ・学んできた過程をふり返る力	
(4) まとめ (2h) ・色々な世界地図を見てわかったこと、考えたことを話し合う ・レポートを書く。	くらし、言葉、食べ物・違いがたくさんあるなあ いろいろな国いろいろな人が関わり合っているなあ 各自でまとめ・レポート	・自分なりの方法で調べたことをまとめる力 ・学んだことを今後の学習や生活に生かす力	

い力」と「評価の手だて」を明記している。

また、学習活動に、中間発表・情報交換の場や振り返りの場を設定して、自己評価や相互評価の活動を組み込むなど、評価方法の工夫をしている。

### (3) 自己評価能力を育てる

#### ① 自己評価の意義

子どもが自ら課題を設定し、主体的に学習を進める「総合的な学習の時間」においては、子ども自身が学習状況を振り返り、自分なりに評価し、改善を図っていくことは、極めて重要なことである。

自己評価することをとおして、学びの確認と調整をしていく。また、自分の成長やよさを知り、新たな課題に対して追究しようとする意欲や生き方を考える力を高めることができる。

#### ② 自己評価の観点と基準の作成

個々の子どもが「これをしたい、知りたい」という目標を明確にもち、自己の学びの軌跡を子ども自身ははっきりと意識できるようにする必要がある。

そこで、自己評価の観点として、

ア 学習内容に関わること（自ら課題を見つけられたか。新しい課題ができたかなど）

イ 学習活動への関わり方（自分で進めてきたか。友達と協力して活動できたかなど）

の2つは欠かせない。評価の基準については、教師が学年や発達段階に応じて示しながら、次第に自己認識を深める基準へと子ども自身が設定できるようにしていくことが大切である。

また、自己評価をカード化し、「調べたいことや知らせたいこと」「調べ方や知らせ方」など自らの学習の歩みを記録として残しておくことは、考え方を整理するだけでなく、学習を振り返り、まとめるなど、自己への問いかけをし、自らの生き方を考える機会になる。

#### ③ 相互評価や他者評価と組み合わせる

自己評価は、時として甘くなりがちである。子ども同士の相互評価や教師や地域の大人などによる他者評価を取り入れ、他人からの評価を受け止める力を身に付けるとともに、自己の能力や適性などを自分で確認し自己評価をより確かなものにしていく必要がある。他者が評価を行う場合、できるかぎり相手のよさや可能性を認め肯定的な評価を提供しようとする姿勢・高めあう視点をもたせることが大切である。

### (4) ポートフォリオによる評価の試み

(2)(3)で述べたように、評価にあたっては、長期的な展望に立ち、継続的に多様な視点からその子どもがどう成長したかを見ていくことが大切である。また、子ども自身も自分の育ちが自覚できることが必要である。

このような評価の工夫改善として、ポートフォリオによる評価が考えられる。

#### ① ポートフォリオの定義

研究途上であるポートフォリオに対する考え方や進め方は多様であるが、安藤輝次は次のようにポートフォリオを定義している。<sup>3)</sup>

自分が自発的に、学びの伸びや変容を多面的多角的かつ長期的に評価し、新たな学びに生かすために学習物や振り返りを集めたものである。

そして、この「自分」が誰か、誰が使うかによって、「子どもポートフォリオ」や「教師ポートフォリオ」となる。また、どのように使うかによって、「成長ポートフォリオ」（自分の学んだ過程を重視した自分の伸びや変容を見ていくもの）と「ベスト・ワーク・ポートフォリオ」（自分の学びの中で最も優れたものを選びまとめたもの）に分けられると述べている。学習の過程を重視する「総合的な学習の時間」には、主に「成長ポートフォリオ」に力点を置くが、卒業時などにおいて、「ベスト・ワーク・ポートフォリオ」を活用することも効果的である。

#### ② ポートフォリオの導入の要素

安藤は、ポートフォリオの導入の要素と子どもの姿を次のようにあげている。

##### 初級レベル

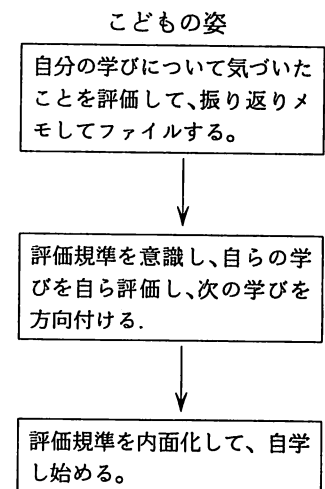
- ① 目的の明確化
- ② 学習物の収集
- ③ 不断の評価

##### 中級レベル

- ① 目的の明確化
- ② 学習物の収集
- ③ 不断の評価
- ④ 評価基準を創って学習物を選ぶ
- ⑤ 発表して感想を聞く

##### 上級レベル

- ① 目的の明確化
- ② 学習物の収集
- ③ 不断の評価
- ④ 評価基準を創って学習物を選ぶ
- ⑤ 検討会で振り返る
- ⑥ 学習物の入れ替え
- ⑦ 発表して感想を聞く



### ③ ポートフォリオの基本的な手順と活用

「子どもポートフォリオ」については、まず、ポートフォリオ（学習ファイル）などに個々の作品や研究物、自己評価カードなどを学習の履歴として時系列で保存する。次に、これらをもとに新しい自分を発見していく視点をピックアップするなど、目的に応じて取捨選択しながら、整理・再構築していく。この際に重視すべきことは対話である。子どもは、自分自身及び教師や友達さらに家族との対話や付箋添付などを通して、自らの学習活動を振り返り、自ら学習活動を修正し調整する。そして、報告書づくりや発表会を行う。

このような繰り返しが、子どもによる自己評価や相互評価などを可能にし、自己評価能力を高めるのに一層有効である。

また、「教師ポートフォリオ」は、学習指導に関した資料・情報をファイル化し、授業の中で活用したり、教師自身の学習指導を自己評価し次の授業に生かしたりするなど、指導の改善に活用できるものである。

さらに、ポートフォリオ評価における子どもとの「対話」や教師間の「検討会」は、教師の子どもを見る力や支援・指導力の向上を図ることが期待できる。

このようなポートフォリオ評価の試みをとおして、子どもと教師が評価を共有し、「測る」評価から「育てる」評価へと評価観を転換し、指導と評価の一体化が図られていくものとする。

#### おわりに

「総合的な学習の時間」を考える研究講座に参加した学校の実践例から見ると、「とりあえずやってみる総合」の段階から「確かなねらいや成果のある総合」の段階に入っていると言える。

「総合的な学習の時間」は、子どもが興味や関心をもった課題からスタートする。子どもが課題をもっていなければ、掘り起こすことから学習が始まる。「自分で課題を見つける」という力をはぐくむために、テーマの設定では、①教師から具体的なテーマを提示、②提示された複数のテーマから選択、③包括的なテーマから自分のテーマを決める、④自力でテーマを決めるなど、学年や個々の子どもの発達や能力に応じて子どもの主体性の比重が高まっていくように工夫することが大切である。

評価とは、子どもに順位をつけることではない。「総合的な学習の時間」では、子ども一人一人の個性や能力に応じた学び方を尊重し、課題解決していく過程での知識や技能、ものの見方や考え方など、一人一人の絶対的な変容を励ましながら評価していく。そのためには、評価について十分理解し、指導計画の中に位置付けて行うことが重要である。

「総合的な学習の時間」の単元やカリキュラムは実践を通してつくりあげていく。修正、改善していく視点が必要である。どんな内容を、どんな学習活動や学習形態を通して、どんな力が育っているかを全職員で明らかにしていくことが、今、求められている。

各学校の実践内容は違っても、各学校がかかえている課題は類似している。この課題解決に向け、各学校が取り組む「総合的な学習の時間」が一層意義あるものとなるように、県立教育研修所として支援していきたい。

#### 引用・参考文献等

- 1) 教育課程審議会答申「児童生徒の学習と教育課程の実施状況の評価の在り方について」(2000)
  - 2) 日台利夫『総合的学習の進め方基礎・基本』東洋館出版社(1999)
  - 3) 安藤輝次「ポートフォリオの本質と課題」、『理科の教育』東洋館出版社(2001. 2月号)
- ・村上雅弘・小林毅夫『小学校学習指導要領の展開総合的学習編』明治図書(1999)
  - ・加藤幸次・安藤輝次『総合学習のためのポートフォリオ評価』黎明書房(1999)
  - ・東京都立教育研究所「総合的な学習の時間の実施に向けた学校・学年経営の在り方」(1999. 3)
  - ・高浦勝義『総合学習の理論・実践・評価』黎明書房(1998)
  - ・木戸章夫「総合的な学習における活動の評価モデルに関する一考察」東京学芸大学附属学校(2000. 3)
  - ・文部省『小学校学習指導要領』『中学校学習指導要領』大蔵省印刷局(1998. 12)

「総合的な学習の時間」に関するアンケート

平成10年12月に告示された新しい学習指導要領において、新たに「総合的な学習の時間」が創設され、各学校が、地域や学校、児童生徒の実態に応じて、教科等の枠を超えた横断的・総合的な学習や児童生徒の興味・関心等に基づく学習など創意工夫を生かした教育活動を行うこととされています。本年度は、その移行期の1年目となっています。そこで、各学校で実践されている「総合的な学習の時間」の取組の様子を把握し、これからの研修の在り方を探りたいと考えています。

1 あなたのことについて、該当する項目に○印をつけてください。

①性別、②経験年数、③職種は略。以下数字は人数、( )内は%を表す。

2 平成12年度の「総合的な学習の時間」の実施状況について

(1) 各学年で、どれくらいの時間実施しておられますか。(1-(4)-①)

小学校・養護学校	3年	4年	5年	6年
①0時間	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
②1～17時間	3(2)	3(2)	3(2)	5(3)
③18～34時間	21(12)	22(12)	23(13)	19(11)
④35時間	53(30)	48(27)	41(22)	42(23)
⑤36～69時間	54(30)	53(30)	53(30)	52(29)
⑥70時間	30(17)	30(17)	30(17)	29(16)
⑦71～104時間	12(7)	17(10)	21(12)	24(14)
⑧105時間	4(2)	4(2)	5(3)	5(3)
⑨106～130時間	0(0)	0(0)	1(1)	1(1)
中学校・養護学校	1年	2年	3年	
①0時間	15(17)	36(42)	43(51)	
②1～17時間	10(12)	9(10)	6(7)	
③18～34時間	16(19)	16(19)	12(14)	
④35時間	19(22)	13(15)	15(17)	
⑤36～69時間	16(19)	8(9)	8(9)	
⑥70時間	9(10)	4(5)	2(2)	
⑦71～104時間	0(0)	0(0)	0(0)	
⑧105時間	1(1)	0(0)	0(0)	
⑨106～130時間	0(0)	0(0)	0(0)	

(2)各学年で、どのような内容を取り上げましたか。(2つ以内)

(1-(4)-②)

小学校・養護学校	3年	4年	5年	6年
①国際理解	14(8)	6(3)	9(5)	25(14)
②環境	42(24)	68(38)	60(34)	30(17)
③福祉	44(25)	62(35)	38(21)	44(25)
④健康	7(4)	7(4)	15(8)	7(4)
⑤人権	14(8)	16(9)	22(12)	39(22)
⑥安全・防災	0(0)	5(3)	1(1)	1(1)
⑦外国語会話	1(1)	3(2)	1(1)	3(2)
⑧地域の特色・伝統文化	90(51)	56(32)	64(36)	61(34)
⑨興味・関心に応じた内容	30(17)	23(13)	26(15)	30(17)
⑩その他	8(5)	9(5)	12(7)	13(7)
中学校・養護学校	1年	2年	3年	
①国際理解	4(6)	4(8)	13(30)	
②情報	2(3)	1(2)	1(2)	
③環境	14(20)	5(10)	9(21)	
④福祉	21(30)	15(30)	7(16)	
⑤健康	5(7)	3(6)	2(0)	
⑥人権	10(14)	9(18)	11(26)	
⑦安全・防災	1(1)	1(2)	0(0)	
⑧外国語会話	1(1)	0(0)	0(0)	
⑨地域の特色・伝統文化	32(45)	22(44)	9(21)	
⑩興味・関心に応じた内容	7(10)	7(14)	6(14)	
⑪その他	4(6)	6(12)	3(7)	

(3) この時間と教科等の関連についてお答えください。(1-(4)-③)

(複数回答)	小学校	中学校
①複数の教科とを関連させた	95(54)	13(18)
②教科、道徳、特別活動とを関連させた	104(59)	32(44)
③自然学校など学校行事と関連させた	40(23)	31(43)
④学校裁量の時間と関連させた	31(18)	12(17)
⑤教科等との関連をあまり図っていない	14(8)	18(25)
⑥その他	3(2)	0(0)

(4) この時間を実施することによって、児童にどのような成果がありましたか。(3つ以内) (1-(4)-④)

	小学校	中学校
①主体的な学習ができた	53(30)	24(33)
②興味・関心が高まった	81(46)	30(42)
③体験的な学習ができた	134(76)	45(63)
④人との交流ができた	62(35)	24(33)
⑤地域との交流ができた	109(62)	36(50)
⑥国際理解が進んだ	9(5)	2(3)
⑦情報機器の活用ができた	35(20)	13(18)
⑧その他	1(1)	0(0)

(5) この時間を実施する上で、困ったことは何ですか。(1-(4)-⑤)

(3つ以内)	小学校	中学校
①教師間の共通理解	61(34)	25(35)
②準備や打合せの時間確保	123(69)	46(64)
③教育課程への位置づけ	26(15)	13(18)
④指導時数の確保	61(34)	23(32)
⑤教師と児童生徒のねらいとずれ	33(19)	15(21)
⑥学校外の指導者の活用	55(31)	13(18)
⑦校内での活動場所の確保	32(18)	27(38)
⑧その他	20(11)	8(11)

3 平成13年度からの「総合的な学習の時間」の実施に向けて、期待や予想される課題についてお尋ねします。

(1) この時間のねらいを達成するために、重要だと思われることは何ですか。(3つ以内) (1-(4)-⑥)

	小学校	中学校
①教職員のゆとり	54(31)	33(38)
②教職員の共通理解	104(59)	58(67)
③単元開発の工夫	98(55)	27(31)
④家庭や地域の協力	80(45)	28(33)
⑤児童生徒の興味・関心	43(24)	23(27)
⑥図書館の設備等学習環境の整備	66(37)	36(42)
⑦校長、教頭のリーダーシップ	38(21)	23(27)
⑧その他	7(4)	2(3)

(2) この時間を今後実施していく場合、地域のどのような特徴を生かそうと考えますか。(3つ以内) (1-(4)-⑦)

	小学校	中学校
①地域の人材	135(76)	64(74)
②地域の自然・環境	126(71)	42(49)
③地域との交流活動	104(59)	53(62)
④ボランティア活動	32(18)	28(33)
⑤地域の施設	30(17)	21(24)
⑥職人の技・工芸・産業等	29(16)	9(10)
⑦その他	1(1)	0(0)

(3) この時間を今後実施していくことに、どんなことを期待しますか。(3つ以内) (1-(4)-⑧)

	小学校	中学校
①体験的な学習による興味・関心を重視した学習	114(64)	57(66)
②主体性や行動力の伸長	94(53)	40(47)
③思考力、判断力、問題解決能力の育成	86(49)	34(40)
④人との関わりを学ばせる	100(56)	40(47)
⑤個性の伸長	9(5)	4(5)
⑥豊かな人間性	42(24)	18(21)
⑦教科間の連携	6(3)	7(8)
⑧教育課程実施上の工夫(特色化、弾力化等)	34(19)	21(24)
⑨その他	0(0)	0(0)

(4) 今後、この時間を実施していく場合、どんなことが問題になると思われますか。(3つ以内) (1-(4)-⑨)

	小学校	中学校
①カリキュラム編成	96(54)	56(65)
②教師の認識の違いや連携	69(39)	34(40)
③指導時間の確保	34(19)	16(19)
④指導方法	35(20)	19(22)
⑤教科との調整	21(12)	12(14)
⑥地域の特性や人材の活用	49(28)	22(26)
⑦教材の作成	33(19)	9(10)
⑧異校種間の連携	8(5)	6(7)
⑨評価	54(31)	27(31)
⑩活動場所の確保	20(11)	18(21)
⑪学習環境の整備	50(28)	23(27)
⑫その他	12(7)	4(5)